

学 位 論 文 要 旨

学位論文題目 『大江千里集』に関する研究

申請者氏名 邵 楠

本研究は、『大江千里集』に込められた大江千里の個人的な意図と、そこに見られる作歌方法という二つの課題に取り組んだものである。具体的には、『千里集』の序文、「述懷部」、「詠懷部」を主な研究対象として、テキストに依拠した分析を行いつつも、そこに編纂の契機、撰者千里の身辺的な状況、あるいは時代状況といった、いわば作品外部に対する視点を導入することにより、『千里集』に込められた千里の個人的な意図を考察した。また、千里の作歌方法の考察では、『千里集』の九十二番歌を対象として、当該歌に見られる九世紀当時の和漢交渉の有り様を顧みつつ、その作歌方法の具体化を試みた。各章の概要は以下の通りである。

第一章『『大江千里集』の成立意図—序文を端緒として—』では、『千里集』の来歴を伝える序文を取り上げ、そこに書かれた「古今」と「餘孽」という語の解釈を端緒として、『千里集』の成立意図について検討した。『千里集』の成立契機となる宇多天皇の勅命にあった「古今」とは、「古」は古い他者の和歌、「今」は千里の自作詠をそれぞれ指す。このような勅命に対して千里が応じたのは、古い漢詩句を踏まえて新たに和歌を詠むという形式であった。このような試みをあえて実行した千里の意図について、本研究では「餘孽」という語を手掛かりに検討を加えてきた。そこには、大江氏という儒門の一族に生まれながらも、昇進が兄弟より遅れた千里の劣等感がうかがえる。そのような千里にとって、宇多天皇による新たな歌集の依頼は、昇進につながる絶好の機会であったと推測される。千里がその機会を逃さず、儒者を重視する宇多天皇に対し、自身の構想した通りに漢詩文の素養を示し、漢詩句と和歌を結びつけるという新しい趣向を披露し得た。『千里集』が和歌史の上で句題和歌という新たな形式を打ち出すことになった経緯には、このような事情が契機として働いていたとの見解を提示するに至った。

第二章『『大江千里集』の述懷部に関する考察—その主題をめぐって—』では、従来あまり注目されてこなかった「述懷部」を取り上げ、そこに収められた和歌と句題を分析することによって、千里の「所懷」を考察した。この「述懷部」に詠まれる「所懷」とは、千里が自分の内面を凝視することで輪郭を表してくる我が身、人生や世の中に対する認識、即ち、人生観や処世観であり、これらは感傷的な詠嘆と、超然たる態度を基調として吐露されている。また、「述懷部」には句題の趣旨から乖離する歌もあることに着目し、句題の持っていた老荘思想的な閑適の気分が、千里の歌では払拭されていることを指摘した。果たして、千里はなぜ述懷歌を詠む際に、句題が持っていた老荘思想的な閑適の気分を払拭したのか。その際、留意したのは奈良時代から平安時代にかけて、老荘思想が独善的と見做され、政治を掌る立場の人々からは有害なものと否定されていた点である。本研究では、千里の述懷歌において老荘思想的な閑適の気分が払拭されている理由をそのような歴史的状況を考慮してのことであ

たと解した。

第三章『大江千里集』の詠懷部に関する考察—その表現手法に着目して—では、「詠懷部」に収められた歌の表現手法に着目し、千里の意図について検討を行なった。従来の研究では、『千里集』における「詠懷部」の歌については、主題上、集中的に不遇が詠まれていること、及び、漢詩文表現を有することが指摘されてきた。こういった先行研究を踏まえつつ、本研究では「詠懷部」の歌に詠まれる不遇が、概ね事物を介するかたちで導かれているという表現手法上の特徴を指摘した。具体的に言えば、千里は「詠懷部」では事物の客観的な性質や現象などを描きながら、そこに自分の姿を投影し、自分の不遇を間接的、婉曲的に表出するという手法を取った。千里はなぜこういった間接的、婉曲的な表現手法を用いて不遇を述べるのか。実は千里の生きた時代にあつて、直接的な不遇の表出は詩宴、歌合などの公的な場では長く忌避されてきた。召歌においても、自らの不遇を直接的に訴えたものは古今集以前に多くを見出すことはできず、基本的には間接的、婉曲的な形を用いて自らの不遇を訴えたとされている。これらのことを考慮すると、千里が「詠懷部」で間接的、婉曲的な手法を用いて不遇を述べるのは、当時支配的であつた、直接的な不遇の表出を忌避するという配慮が働いたと結論づけた。

第四章『大江千里集』の九十二番歌からみた作歌方法」では、『千里集』の九十二番歌に注目する。当該歌に見られる九世紀当時の和漢交渉の有り様を指摘しつつ、その作歌方法を次のような段階的なものとして導出した。即ち、九十二番歌の句題について、千里はまず、中国の漢詩の中から、離別に関わる血涙が袖を濡らすという表現を含む詩句を選び、それを句題とする。そして、その句題をもとにして和歌を作る過程で、千里は句題にあつた友との離別という状況を離れ、同種の表現を用いる九世紀当時の日本の詩歌の趣旨、即ち恋人との離別という状況に沿って改作する。また、表現面では、千里は句題にある漢語を、当時流通していた歌語と適合する形に変形して和歌に用いる。これらの作業によって詠まれた九十二番歌は、千里が当時の日本の詩歌に対する嗜好や傾向によって、中国の漢詩句を選択、変容した産物とも言える。

終章では、『千里集』に込められた千里の個人的な意図は、彼が自分の身の置かれた社会的な地位をめぐって、不遇を訴えたり、昇進を企図したりするというものもあることを総括し、その背景には、千里による時代状況や政治状況に対する配慮が働いているという見解を提示した。また、『千里集』の作歌方法に関する考察では、『千里集』の歌の中には、漢詩句題を単に模倣するものとは別に、和漢交渉の痕跡がうかがえるものもあるということを指摘した。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 178 号	氏 名	邵 楠
論文題目	『大江千里集』に関する研究		

(論文審査概要)

本論文は、平安時代前期の歌人である大江千里の編纂した『大江千里集』を対象として、そこにかがえる千里の編纂意図と作歌方法について考察を展開したものである。編纂意図については、『千里集』の序文、述懐部、詠懐部を主な研究対象として、編纂の契機、千里の身辺的な状況、時代状況などといった作品の外部の情報を顧慮しつつ考察。また、作歌方法については、九世紀当時の和漢交渉の有り様を顧みつつ、その作歌方法の具体化を試みる。

本論文の構成は、序章、及び四つの章にわたって展開される本論部分、そしてそれらを総括する終章から成る。また、巻末には各章の参考文献目録を収める。各章のタイトルは以下の通りである。

序章

第一章：『大江千里集』の成立意図—序文を端緒として—

第二章：『大江千里集』の述懐部に関する考察—その主題をめぐって—

第三章：『大江千里集』の詠懐部に関する考察—その表現手法に着目して—

第四章：『大江千里集』の九十二番歌からみた作歌方法

終章／参考文献目録

1. 創造性

本研究の学術的な特色は、『大江千里集』の句題和歌という作歌方法を、九世紀当時の和漢交渉という観点から捉え直す点に求められる。従来の研究では、千里の句題和歌という作歌方法について「稚拙生硬」であるとか、句題の「直訳」であるといった消極的な評価に終始する傾向にあった。しかし、本研究では詠者である千里の個人的な所懐が織り込まれていることや、その所懐が間接的、婉曲的に表現されていることを明らかにし、漢詩から和歌へという表現の変換の契機を具体化することに成功している。この点をもって本論文の創造性は優れていると判断した。

2. 論理性

本論文では、『大江千里集』の編纂意図と作歌方法を考察するうえで、漢籍や作品外部の状況を論拠にしながら分析を進める。以下に、各章で論拠とされた漢籍や作品外部の状況に触れつつ、その概要を示す。

第一章「『大江千里集』の成立意図—序文を端緒として—」では、『千里集』の序文に書かれた「古今」と「餘孽」という語の解釈を端緒として、『千里集』の成立契機について考察する。宇多天皇の勅命にあった「古今」の「古」とは古歌を指すものであったのを、千里は古詩の句と捉え直し、句題和歌という新たな形式を試みてゆく。千里がこのような試みを実行した動機について、本章では漢籍に散見される「餘孽」という語を手掛かりに、千里の劣等感と漢詩の素養の誇示があったとの見解を提示する。

第二章「『大江千里集』の述懐部に関する考察—その主題をめぐって—」では、述懐部に収められた和歌と句題を分析することによって千里の所懐を考察する。その所懐とは、千里が自分の内面を凝視することで輪郭を表してくる人生観や処世観であり、これらは句題の持っていた老荘思想的な閑適の気分を払拭することで発せられていくことを、奈良時代から平安時代にかけての老荘思想をめぐる歴史的状況を顧みつつ考察する。

第三章『大江千里集』の詠懷部に関する考察―その表現手法に着目して―では、詠懷部に収められた歌の表現手法に着目し、千里の詠歌動機に自らの不遇意識が働いていることを指摘する。即ち、詠懷部では事物の客観的な性質や現象などを描きながら、そこに自らの不遇が間接的、婉曲的に表出するという手法が取られていること、そして、そのような表現手法には同時代の詩宴、歌合などの公的な場における詠作の慣習が影響していたことを指摘する。

第四章『大江千里集』の九十二番歌からみた作歌方法では、雑部（離別部）所収の九十二番歌を取り上げ、その作歌方法に九世紀当時の和漢交渉の在りようがうかがえることを論じる。即ち、漢詩において用いられる「血涙」が和歌では「紅涙」へと変更され、その原因についても友との惜別から恋人との別れへと変わってゆくことを指摘し、千里の句題和歌における改作の方法的特徴をそこに見出す。

上記の通り、各章では漢籍や作品外部の状況を論拠としながら『大江千里集』の編纂意図や作歌方法を具体化し得ており、その論証の手続きも説得力のある成果を挙げていると判断される。よって、本論文の論理性は優れていると判断した。

3. 厳格性

本論文の序章では、論を展開する前提として大江千里の作歌方法に関する先行研究の状況が概観され、近年の成果を受けるかたちで本研究の立脚点が示されている。また、『大江千里集』の編纂意図についても歌人として的大江千里を論じる先行研究の状況を踏まえたうえで、本研究の視点の可能性が説明されている。

各章の冒頭では、『大江千里集』の個別の問題に関連する先行研究の渉猟と整理に努めており、このような手続きのもとに本研究の立場を画定し、そのうえで論を展開していくという姿勢が貫かれている。以上のような点をもって、本研究の厳格性は優れていると判断した。

4. 発展性

本論文は、先行研究が領導してきた『大江千里集』に対する消極的な評価をそのまま受け入れるのではなく、句題和歌という作歌方法の嚆矢として和歌史のうえに正当に位置づけようとする意識が顕著であり、そこに発展性がうかがえる。とりわけ、従来は『万葉集』から『古今集』へという観点で論じられる傾向にあった古代和歌史の流れに対し、その間にある漢詩文隆盛期の影響を探る和漢交渉という視点は今後も継続的に検討を重ねていくべき価値のあるものと言える。

以上、審査委員3名の合議により、全体として「優れている」と判断し、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果

Ⓐ・否

審査委員 主 査 (氏名)

森野正弘

(氏名)

横田尚俊

(氏名)

柏木寧子